

1 黒斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は発病葉に付いて越冬し、翌年の伝染源となる。秋に発生することが多い。苗に発生したときは被害が大きいため、生育初期の発病には特に注意し予防防除に努める。
- 2 生育不良になると発生しやすいので、発病の多い秋期に生育を衰えさせないような肥培管理を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 土壌改良や適切な肥培管理により、秋期の生育が旺盛となるようにする。
- 3 病葉を処分する。

2 うどんこ病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は子のう殻の形で被害組織とともに越年し、翌年の伝染源となる。夏期高温時にゴボウの生育が一時停滞する頃、下葉から急に発病するので、この時期の薬剤防除を徹底する。
- 2 日当たりや通風の悪いほ場、多肥栽培で発生が多い。

B 耕種的防除法等

- 1 日当たりと風通しの良いほ場を選ぶ。
- 2 密植を避け、通風採光を良くする。
- 3 適正な肥培管理を行う。

3 根腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害組織などに形成された卵胞子の形で越冬し土壌伝染する。春まき栽培では晩まきにすると、また秋まき栽培では早まきにすると、発生が多くなるので発病ほ場では播種期にも注意する。
- 2 土壌水分が高いと発病が多い。降雨が多い年や梅雨期には発生しやすいので、ほ場の排水を良くするように努める。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 石灰を施用する。

4 萎凋病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害組織中の厚膜胞子の形で越冬し、土壤伝染する。酸性土壤で発生しやすく、地温25℃以上で発生が多い。連作を避け、pHを6.0～6.5にし、ゴボウの生育を旺盛にする。
- 2 本病にかかると地上部に奇形症状が現れるので、間引時に葉身が奇形または半分黄化、萎凋している株は抜き取り処分する。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 土壤pHを6.0～6.5に矯正する。
- 3 被害残さの処分を行う。

5 黒あざ病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害植物に菌核あるいは菌糸塊の形で付着または腐生し、土壤伝染する。
- 2 病原菌は、一般的にどの畑にも存在しているため、はじめてゴボウを栽培するほ場でも発生する場合があります。連作すると発病が多くなる。被害残さの処分を徹底し、土壤中の病原菌密度を高めないようにする。
- 3 低湿地で発生しやすく、夏～秋にかけて雨の多い年に多発しやすいので、ほ場の排水を良くする。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 被害残さの処分を徹底する。
- 3 ほ場の排水を良くする。

6 紫紋羽病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は土壤中で菌糸塊や菌核の形で残り、土壤伝染する。イネ科作物を除く多くの作物を侵すので、発病ほ場ではイネ科作物との輪作を行う。
- 2 被害植物をほ場に放置すると、病原菌の密度を高め被害が拡大するため、必ずほ場外へ持ち出して処分する。

B 耕種的防除法等

- 1 発病ほ場ではイネ科作物と4～5年の輪作を行う。
- 2 被害植物を早めには場外に持ち出し処分する。
- 3 ほ場の排水を良くする。

7 黒斑細菌病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害作物とともに越冬し、翌年の伝染源となる。
- 2 連作、窒素過多は発病を助長し、畑かん栽培では発生が多い。発病ほ場では連作を避け、ほ場の排水を良くするとともに適正な肥培管理を行う。
- 3 被害作物はほ場外に除去し、ほ場衛生に努める。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害残さの処分を行う。

8 ゴボウヒゲナガアブラムシ

A 生態と防除のねらい

- 1 寄生植物はゴボウ、ハナアザミ、ベニバナなどのキク科植物で、葉の裏やつぼみ、特に若葉に多く群生する。
- 2 春から秋まで10数世代を繰り返すが、5月上旬頃からゴボウの茎葉に寄生し、6月下旬頃を最高として7月下旬頃には少なくなる。秋は10月～11月に発生が多くなる。
- 3 加害が進むと葉を巻き、薬剤が虫体にかかりにくいので、早めに防除する。

B 耕種的防除法等

ほ場周辺のキク科植物を除去する。

9 フキノメイガ

A 生態と防除のねらい

- 1 成虫の発生は4～5月、6月、7～8月、9月の4回とみられる。
- 2 一般に春先から発生し、成虫はゴボウの葉の裏に卵を産み、ふ化した幼虫は葉柄に食い込みながら糞を穴から出す。秋まきには少ない。

10 ゾウムシ類

A 生態と防除のねらい

1) ハイイロサビヒョウタンゾウムシ (トビイロヒョウタンゾウムシ)

- 1 成虫は極めて多食性で多くの野菜類、雑草等の葉を食害し、ゴボウでは発芽初期の被害が大きい。幼虫は、土壌中に生息し、主根の皮層部を不規則に食害するので、外観が著しく損なわれる。
- 2 年1回の発生で、成虫は土壌中で越冬し、3月中旬から地上へ出現する。ゴボウほ場への侵入は、4月上旬から見られ、4月下旬～5月上旬が最も多く、6月中旬にはほぼ終息する。
- 3 防除は越冬成虫の産卵防止をねらって行う。散布は4月中旬から5月下旬まで7～10日おきに連続散布する。
- 4 ほ場での発生は不均一で、一般にほ場周辺で多く、特に、前年のゴボウ跡地や雑草の繁茂する畦畔に面する場所で多いので、これらを含めた広域防除が必要である。

2) サビヒョウタンゾウムシ

- 1 南西暖地での生態は十分明らかでないが、本種は内陸部の砂質土壌地帯で発生が多い傾向があり、発生経過、加害状況及び寄生植物等はハイイロサビヒョウタンゾウムシに類似している。
- 2 年1回の発生で、前年作付ほ場の畝内、残存株元及び畦畔雑草の株元などで成虫で越冬し、3月中旬頃から地上へ出現する。ゴボウほ場への侵入は4月上旬頃から始まり、侵入及び産卵は6月末まで続く。
- 3 前年作付ほ場の土壌消毒は、越冬成虫の密度低減に有効である。
- 4 ふ化幼虫が地中に潜入してからでは防除効果が上がらないので、防除は越冬成虫の産卵防止をねらって行う。
- 5 その他は、ハイイロサビヒョウタンゾウムシに準ずる。

3) ワモンヒョウタンゾウムシ

- 1 年1回の発生で幼虫または成虫態で土壌中で越冬する。
- 2 成虫は4月頃から活動を始め、5～6月が最も多い。
- 3 成虫はゴボウの新葉、新芽を好んで食害するので、春季の発芽初期の被害が大きい。
- 4 幼虫によるゴボウ根部の被害は8月以降掘取りのものに多い。
- 5 幼虫は主根の皮層部を不規則に食害するので、外観が著しく損なわれる。
- 6 越冬世代成虫を防除して産卵防止をはかる。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を刈り取り、環境の整備を行う。
- 2 新生幼虫による被害を回避するため、できるだけ早めに収穫する。
- 3 連作を避ける。
- 4 ヒョウタンゾウムシ類は後翅が退化し、移動は歩行のみによるので、畦畔板等の障壁による成虫のほ場内侵入防止を組み合わせると効果が高い。

11 ゴボウネモグリバエ

A 生態と防除のねらい

- 1 幼虫態で越冬し、2月下旬～3月に蛹化する。第1世代成虫の最盛期は4月下旬～5月上旬、第2世代は6月中旬、第3世代は7月下旬で以降10月下旬まで発生し、年5回発生する。
- 2 成虫は地際葉柄の表皮下に産卵し、幼虫は根部に潜孔加害する。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 2 新生幼虫による被害を回避するため、早めに収穫する。